

へき地・過疎地域における国際交流活動と異文化受容の深化 — 佐呂間町とアラスカ州パーマ市における中高生相互派遣事業を事例として —

瀬川 圭太
(北海道大学大学院)

International Exchange in Underpopulated Areas and Deeping Intercultural Acceptance: Focusing on Youth Overseas Training Program Between Saroma City and Palmer City

Keita SEGAWA

(Graduate School of Hokkaido University)

概要

本稿は、へき地・過疎地域における海外姉妹都市提携に基づく中高生相互派遣事業プログラムについて、その長期的な教育効果を明らかにすることを目的とする。その対象としては、佐呂間町とパーマ市の交流事業を取り上げ、参加後数年から数十年経った3名に、「語り」に着目した聞き取り調査を行なった。その結果、本プログラムの長期的な教育効果として最も特徴的なものは、異文化受容の深化である。北海道とアラスカ州に住む人々は、共に雪国で厳しい冬に耐えなければならないこと、へき地性の高い場所で暮らすことの大変さを共有しており、それが異文化理解に留まらず、異文化を持つ人々を受容し共生することのできる態度・能力が育まれる契機となっていた。これは、北方圏のへき地・過疎地域における国際交流活動の意義と可能性を示すものであると言える。

1. はじめに

本稿は、へき地・過疎地域における海外姉妹都市提携に基づく中高生相互派遣事業プログラムについて、その長期的な教育効果を明らかにすることを目的とする。長期的な教育効果に着目するのは、参加直後には「楽しかった」「また行きたい」としか捉えられていなかった経験が、それ以降の人生経験によって意味付けられ、教育効果がより顕在化してくると考えられるからである。その対象としては、オホーツク総合振興局の中央部に位置し、その全域が過疎地域に指定される佐呂間町を取り上げ、姉妹都市であるアラスカ州パーマ市との交流事例に着目した。パーマ市は、アラスカ州の玄関口かつ最大の都市であるアンカレッジ市から自動車ですら1時間前後の距離にあるベッドタウンである。

本稿が、北海道とアラスカ州という共にへき地性の高い地域同士の国際交流活動に注目するのは、へき地・過疎地域の小規模校同士が交流することに新たな教育的意義が見出せるからである。近年では、ICTの活用が学校現場において急速に進んでいるが、鹿児島県徳之島町のように、ICTを活用して双方向遠隔合同授業を行なって、小規模校同士連携することによって、へき地・小規模校で従前から指摘されてきた課題を克服しようとする動きが見られるようになってきている^(註1)。また、北海道とアラスカ州というのは、自然・位置・歴史・文化など重なるところが多

く見られる。国際交流といえば、「異文化」の強固な違いを見ることも必要であるが、そのことが共生社会意識から逆行して、羨望と卑下、あるいは異質な差別意識を醸成してしまうことがある。北海道とアラスカ州という、いわゆる「辺境同士」の国際交流は、新たな社会的視野・地域認識の獲得、そしてその共通性に基づく相互理解の深まりも期待できる。

アラスカ州の取り組みを北海道の教育に活かそうとする研究は、これまでに様々な観点からなされてきた。まず、玉井(1997)は、アメリカの教育改革が州ごと、学校ごとに進んでいることを指摘し、アラスカで行われている様々な学校改革の事例のうち3つの典型的な先進事例(ウッドリバー小学校・アンドリューデモスキー学校・アキアチャック小学校)から、父母や地域を含めた教育環境の改革とそのための学校経営改革・地域に根ざした教育課程の再編成・学校評価の父母や地域住民への開放、という生涯学習社会に向けて日本が学ぶべき3つの観点を抽出している。次に、川前・玉井・二宮編(2016)では、アラスカの小規模校の視察から、アラスカの教育には、①アラスカ大学が学校の特色づくりに大きく貢献していること、②地域と一体となった教育活動が行われていること、③インクルーシブ教育の先進性、④西洋型文化と地域の文化の調和がとれたカリキュラム、⑤地域教材キットの蓄積、⑥自然を活かした体験的活動の充実、という6つの特徴があることを捉えて、そこ

から日本のへき地教育への教訓を取り出している。また、伊藤（2020）では、アラスカ先住民族の教育史から、へき地教育に欠かせない3つの要件、①居住地域内に学校があること、②教育行政が地域分散型であること、③学校と地域の間に相乗効果を生み出すような関係性を築くことを指摘した。さらに、アラスカ先住民族にとってへき地教育は所与のものではなく、人権として勝ち取ってきたものであることを指摘し、先進国や途上国のへき地教育の在り方に大きな示唆を示した。最後に、玉井・川前（2021）では、アラスカにおける学校と地域の多文化理解教育の具体的な実施施策を捉え、アラスカガイドラインとアラスカスタンダードの導入と義務化、先住民族文化を科学的に意味づけ教材化することなどを相乗的に展開することが共生社会の実現のためには必要だとした。このように、これまで社会教育と学校教育の連携、へき地教育などの観点から数々の研究が蓄積されてきている。しかし、北海道とアラスカ州との国際交流は、全道の各地で長きにわたって行われているが、これまで学術的な関心の的となることがなかった。中には、姉妹都市締結の周年記念誌などにプログラムの概要や、何名かの参加者の感想などが記載されていることがあるが、その長期的な教育効果について、科学的な手法で調査・分析をし、明らかにしたものはない^(注2)。そのため、北海道とアラスカ州の国際交流活動における教育効果については、検討すべき点が多く残されている。

一方で、北海道とアラスカ州に限らない、海外姉妹都市提携に基づく日本の自治体と海外の自治体の国際交流活動の教育効果については、短期・長期の両面から、これまでにいくつかの検討がなされてきた^(注3)。長期的な教育効果については、平井・阿部・尾中（2020）では、海外研修帰国直後に見られた効果を踏まえ、中学時代の海外研修体験が、その後の人生にどのような意味を持つのかを明らかにするために、東北2県の高等教育機関において、中学時代に市町村が主催した海外研修に参加した経験のある12名の被験者を対象に半構造化インタビューを行い、M-GTAによるモデルの構築を行なった。12名の被験者の研修先は、6名がアメリカ、2名がカナダ、2名が中国、1名がオーストラリア、1名がブルガリアである。その結果、帰国直後に見られた異文化・多様性への気づきと関心などの、意識・態度・行動の変化が、中学時代以降の国際的活動への積極的な参加につながっていることが分かった。また、進路についても世界を視野に入れたキャリア設計を行っており、海外研修によって生じた意識変化は、必ずしも一過性のものであるのではなく、その後も継続的な行動変化を促しうることが示された。次に、久保（2017）では、愛媛県内子町からドイツ・ローデンプルクに派遣された派遣生の現在や事業実施の効果を明らかにするために、派遣生全員へアンケート調査をし、その分析を行なった。その結果、海外への興味が強くなったり、ドイツあるいは内子町や日本が好きになったりという派遣生の意識の変化や、進路・就職に対する影響が明らかとなった。これらの研究からは、帰国直後に見

られた意識変化がその後も続いていくことや、その後の進路などにも影響を及ぼすことが示唆されており、海外姉妹都市提携に基づく国際交流活動の教育効果に対する貴重な知見が蓄積されつつあると言える。しかし、これらの研究は、日本と相手国の内部に見られる多様性を捨象していることに問題があるといえる。日本国内においては、北海道や沖縄のように本土とは異なる歴史・文化をもつ地域が存在しており、それは相手国にとっても同様である。国際交流の目的の一つに、異文化理解・受容があるが、その目的を真に達成するためには、それぞれの国の中にある文化的差異にも目を向けていく必要がある。その点、本稿は、アメリカにおけるアラスカ、日本における北海道というそれぞれの国における立ち位置に着目しているため、先行研究にはない視点を有している。

本稿の調査対象としては、佐呂間町とアラスカ州パーマ市の取り組みを選定した。アラスカ州の都市と海外姉妹都市提携を結んでいる日本の自治体は、道内に集中しており、千歳市、帯広市、根室市、佐呂間町、天塩町、紋別市の6市町があるが、そのうち現在でも青少年を相互に派遣しているのは、千歳市、帯広市、佐呂間町に限られる。根室市や天塩町もかつては行なっていたが、参加者の減少や、自治体の補助金が打ち切りになり、行われなくなった。そうした中で、佐呂間町とパーマ市の取り組みは、中高生の自己負担が少ないこと、現地では学校に通えること、ホームステイができることなどの点で最も優れていると筆者が判断したため、調査対象地域として選定した。

佐呂間町は、オホーツク総合振興局内のほぼ中央部に位置し、北方はサロマ湖、その他を湧別町・遠軽町・北見市に囲まれている。人口は、2021年では4873人で、ピークであった1953年の16801人の4分の1程度になろうとしている。北海道のその他の多くの市町村と同様に人口減少に苦しんでおり、町内全域が過疎地域に指定されている。佐呂間町の主幹産業は漁業と酪農・畜産である。漁業では、サロマ湖の恵みを生かしてホタテの養殖を行っており、北海道でも有名な産地の一つとなっている。また、サロマ湖はホタテ養殖発祥の地でもある。酪農・畜産も盛んで、町内には森永乳業の佐呂間工場が置かれている。このほかにも、かぼちゃの生産が盛んで、町の特産物となっている。教育面については、町内に小学校が3校（佐呂間小学校・浜佐呂間小学校・若佐小学校）、中学校が1校（佐呂間中学校）、高校が1校（佐呂間高校）ある。佐呂間中学校から佐呂間高校への、地元進学率は約半分ほどで、佐呂間中学校の卒業生の約半分は、北見市や札幌市に流出している。佐呂間高校は各学年1学級で、地域連携校^(注4)に指定されており、北見柏陽高校からの協力を得ている。卒業生の進路では、半数以上の生徒が進学しており、毎年複数名が4年制大学にも進学している。

佐呂間町とアラスカ州パーマ市は、1980年4月10日、当時佐呂間高校の教諭であった石黒陸弘さんとパーマ市在住のエドワード・ホームズさんがアマチュア無線交信を通

じて親交を深めたことが縁となって、同年10月28日に姉妹都市提携の調印をした。その後、教育や文化、産業や経済など多方面に渡る交流を行ってきており、現在に至るまで親交を深めてきた。40周年記念式典は、コロナウイルスの影響で行うことが出来なかったが、45周年記念式典は行う予定であり、コロナ禍にあっても両都市の親交の灯は消えていない。そうした交流の中で、最も大きな事業が、青少年相互派遣事業であり、1983年から2019年まで、これまで数百名の中高生が両都市を行き来している。

佐呂間町とパーマ市の間で行われる青少年相互派遣プログラムの目的は、「国際社会に対する感性と国際感覚を身につけた創造性豊かな生徒を育成する」ことである。中学生で1回、高校生で1回参加することが出来、1回の派遣では、中学生4名、高校生4名が参加する。応募者多数の場合は、面接などによる選抜は行われず、抽選によって参加者を決定する。また、参加の際には、ホストファミリーとしてパーマ市からの中高生を受け入れることが求められる。2週間程度の滞在となるが、必要経費の3分の2の補助があり、生徒の負担は10万円前後である。また、参加の際、12回程度の事前研修と事後研修への参加も義務付けられている。事前研修では、かつては、簡単な英会話や海外旅行に関する諸注意に加えて、現地の学校で、日本文化についてのプレゼンテーションを行うための資料作成なども行われていたが、現在はプレゼンテーションの準備は行わないようになっている。表1は、2019年の派遣スケジュールである。2020年、2021年、2022年はコロナウイルスの影響で派遣を見送っているため、2019年が最新のスケジュールとなる。

表1 2019年の派遣スケジュール

	スケジュール		スケジュール
9月10日	14:24 アンカレッジ空港着 16:30 ホストファミリーと対面	9月18日	授業参加@パーマ中・高
9月11日	ウエルカムランチ@パーマ中・高 ポットラックパーティー@パーマ中	9月19日	児童と交流@シェラッド小
9月12日	自然散策@ビジターセンター 博物館見学@野生動物保護センター	9月20日	授業参加@グレイシャービュー中 氷河ハイキング
9月13日	御神楽披露@パーマ高 アメフト観戦@パーマ高	9月21日	ホストファミリーと終日過ごす
9月14日	ホストファミリーと終日過ごす	9月22日	ホストファミリーと終日過ごす
9月15日	ホストファミリーと終日過ごす	9月23日	授業参加@パーマ中・高 ポットラックパーティー@パーマ高
9月16日	授業参加@パーマ中・高 ジャコウウシ見学@Musk Ox Farm	9月24日	3:00 パーマ出発 6:00 アンカレッジ空港発
9月17日	パーマ市街見学 ラジオ出演@パーマ市内		

2. 研究の手法

本研究では、プログラムの長期的な教育効果を明らかにするためにあたって、参加後数年から数十年が経過した参加者3名（Aさん、Bさん、Cさん）に対して、「語り」に注目した聞き取り調査を行なった^(注5)。「語り」に注目したのは、調査対象者が、後になって振り返る中で、自分自身で認識の変化を捉えることや、相対的な意義づけが可能になり、長期的な教育効果を明らかにするには適した手法と考えられるからである。その際には、長期的な教育効果の主要因となったであろうと予想されるトピックを提示し、それを踏まえて自由に語ってもらった。提示したトピックは表2にまとめた。以下は、3人の「語り」から共通となるものを分析し、まとめたものである^(注6)。

表2 提示したトピック

1	アラスカに行くことになったきっかけについて
2	アラスカで印象深かったことについて
3	帰国後のキャリア形成について
4	プログラムの長期的な教育効果について

3. アラスカに行くことになったきっかけ

今回調査対象となった3名は、いずれも幼少期に外国から来た人と関わっており、それが楽しい思い出として記憶に残っていた。たとえば、Aさんは、パーマ市から派遣されたALTとの思い出を以下のように話してくれた。

Aさん：本当に小さかったときなので、あまり覚えていないかもしれないんですけど、自主的に私の同級生数人と英会話に行き、その時にニック先生が佐呂間を離れるので、多分アラスカのお菓子、アメリカのお菓子かな、それをみんなで作って食べたのが美味しかったな。

また、Bさんは幼少期からホームステイの受け入れを多く行い^(注7)、教育委員会の担当者からは「アラスカ交流プログラムの申し子」と呼ばれていた。筆者が、「小学校の頃からアラスカに行きたかったか」と尋ねたところ、Bさんは次のように交流プログラムへの参加の意思を表現している。

Bさん：多分ずっと思っていたと思います。兄ちゃんの受け入れていたときから、ずっと思っていたと思います。細胞に組み込まれているのかなと思います。本当に小さいときだから。私は行くもんだと思っていたと思います。

パーマ市から派遣されたALTとの関わりや、ホームステイの受け入れなど、幼少期に外国から来た人と関わった経験が交流プログラムへの参加へとつながっていったと言える。

4. アラスカで印象深かったこと

今回調査対象となった3名は、幼少期の体験が基盤となっており、Aさんは高校生のときに、Bさんは中学生のときに、Cさんは小学生のときに初めてアラスカ州パーマ市に行き^(注8)、2週間の海外生活を体験した。そこでは、北海道での普段の生活において慣れ親しんでいたものの違いに驚くこととなる。以下はAさんとBさんの発言である。

Aさん：アラスカの高校では、自由に授業を組み合わせるので、大学みたいに一人ひとり時間割が違うっていうのが、結構大きな違い。あとは、結構朝が早い。記憶が正しければ、1時間目が7時45分から、でも、その分最後の授業は14時15分に終わって早いので。

Bさん：クラスルームがないのが衝撃だった。

2名の発言からは、初めてのアラスカの生活においては、学校生活の違いが特に印象に残った経験の一つと言える。アラスカにおける2週間の生活の中で、学校で過ごす時間が占める割合は大きい。また、学校生活は日本の生活においても見慣れているものであるため、日本とアラスカの違いを感じやすかったと言える。この他にも、児童生徒が遠方から自家用車で送り迎えされていることや、机などが日本のように整列して並べられていないことが、学校生活の違いとして指摘されていた。

また、北海道で慣れ親しんでいるはずの自然についても、その違いに驚きを感じている。以下は、Cさんの発言でやや長くなるが、アラスカだからこその経験と言えるので、引用を行う。

Cさん：観光は氷河を見に行き、クジラと氷河を見て、流水を見慣れていますけど、あんな大きい氷河を見たことはなかったので、びっくりしたのと、山が大きい。ここら辺(=佐呂間周辺)は低めの山しかないんで、本当に大きい山って見たことがなくて。あと、「ちょっとピクニックに行きましょう」って言われて、「ちょっとした丘を登ります」って付いていったら、めっちゃ高い山で、完全に登山だったんですよ。佐呂間の山って山じゃないんだなって。スケール感の違い。北海道も十分広いし、大きいって思っていたけど、それよりもという感じですよ。

北海道は日本の中では、自然豊かな場所として認識されており、Cさんの認識の中にもそうした思いはあったのだと思われる。しかし、よりスケールの大きい自然に囲まれたアラスカに行くと、見慣れていないはずの自然を違った視点で見えるようになっていく。初めてのアラスカでの生活において様々な経験をすることで、視野が広がり、学校生活や自然に対する認識など日本での経験を相対化するようになったといえるだろう。このような経験をした3名は帰国後、さらに色々なものを体験したいという気持ちや、交流プログラムにさらに積極的に関わろうという思いを強め、再び交流プログラムに参加することを考えるようになった。実際に、Aさんはこの参加の翌年に長期留学を、Bさんは高校で短期留学と長期留学を、Cさんは高校で短期留学を体験した。2回目以降の留学では、3名は表層的ではない深い経験をすることになる。まずは、2回目の短期留学で印象に残ったことを筆者が伺ったときの、Bさんの発言である。

Bさん：高校の時は一緒にいった〇〇ちゃん^(注9)と、〇〇ちゃんのホストファミリーと、発泡スチロールの大きいやつみたいなお風呂があって、バルコニーに出して、バルコニーで4人で、私と、〇〇ちゃん、ホストシスターと4人で、1、2時間くらい風呂入ったんですけど、それとか。

Bさんの発言からは、現地のホストファミリー・ホストシスターとのコミュニケーションが印象に残ったことが分かる。2回目の滞在では、積極的に現地の人と関わって、異文化理解を深めたり、コミュニケーション能力を高めていったのだろう。次は、Cさんが小学校でアラスカに行ったときと、高校でアラスカに行ったときを比較した発言である。

Cさん：結構授業が自由な自由討論みたいな感じだったので、座って、教科書を開いてみたい感じではなかったです。好きな席に座って、「なにちょっと態度悪い」とかなりながらも、自分の発言はしっかりするみたいな。大人って感じでした。

1度目の短期留学でもみられた学校生活の違いに関する発言であるが、2回目の短期留学では、時間割や児童生徒の通学方法などの表面的な違いではなく、日本とアラスカの授業に対する考え方の違いといった違いにも気づいている。次は、長期留学に参加したAさんが、短期留学と長期留学の違いを説明してくれたものである。

Aさん：短期で行ったときは、日本語を勉強している高校生に日本語を教えるためのゲストとして授業に参加していたような感じだったんですけど^(注10)。高校ではみんなと同じように英語で授業を全部受けていました。

Aさん：2週間のときは、たった2週間だからお客さんって感じだったと思うんですよね。なので、家事とかも、服の洗濯とかも全部、ホストマザーにやって頂いて。でも、長期で泊まったところは、2軒泊まったんですけど、1軒目は積極的に家事の手伝いをしてほしいっていうのは留学する前から言われていまして。それで、家族の一員として料理を一緒にしたりとか家事を手伝ったりしていました。

長期留学では、ゲスト・お客さんではなく、家族の一員や学校でも「普通の」生徒として扱われるようになり、Cさんも経験の幅を広げている。Aさん、Bさん、Cさんのいずれも、一度目の短期留学をきっかけとして、さらなる経験したいという思いを強め、実際にアラスカではそれぞれが一度目よりも密度の濃い経験をする事となった。このような初等・中等教育段階での経験が基になって、高校卒業は、3人とも大学あるいは短期大学に進学し、語学を学びながら、さらに自分の視野を広げるという進路を選択していくこととなる。

5. 帰国後のキャリア形成

3名は高校卒業後、大学あるいは短期大学で語学とそれぞれの専門分野を学んでいく。表3は、それぞれの言語と専攻をまとめたものである。

表3 言語と専攻分野

ケース	言語	専攻分野
Aさん	スペイン語	中南米の歴史
Bさん	英語	アメリカ音楽
Cさん	英語	アート

留学経験が基となって、Aさんはスペイン語と中南米の歴史、Bさんは英語とアメリカ音楽、Cさんは英語とアートを大学では学んでいた。語学を中心としながら、自身の視野を広げていこうとしているのが分かる。また、AさんとBさんは、外国の言語や文化に興味を持っているのが特徴的で、アラスカでの経験がその要因となっていると言

えるだろう。

Aさんは現在、大学在学中のため、大学卒業後のキャリアについてはBさんとCさんを対象とする。まず、Bさんは初職では道内主要都市で団体職員となり、現在に至るまでその仕事を続けている。ただ、Bさんは佐呂間町のことを忘れておらず、佐呂間町でパーマ市との国際交流事業に関わる機会も模索している。Cさんは、学卒後、東京で派遣職員となり、その仕事を3年間続けた。その後、東京の法律事務所の外国人部門で10年間働き、コロナ禍で佐呂間町に帰郷。現在は、役場職員となり、パーマ市との国際交流事業の窓口となっている。BさんとCさんのキャリアからは、社会人となって以後、佐呂間町とは違う場所で様々な経験をした後に、佐呂間町に戻ってきて、再び交流事業に関わるという流れを見て取ることができる。その背景には、アラスカ留学をきっかけとした、佐呂間町への意識の深まりがあったと思われる。次は、筆者が「アラスカに行ったことによって、佐呂間町や北海道への愛着の変化はありましたか」と尋ねたときの、Cさんの言葉である。

Cさん：めっちゃ愛着湧いたと思います。全然自分は地元を知らないんだってことを、外に出ると知るじゃないですか。あるあるですけど。それがすごい分かったんで。自分の故郷のことを人に聞かれても、上辺は分かりますが、どういう歴史なのかとか、全然分からなかったから。(中略)ちゃんと地元を知ることで大事だなと思いました。

やや長い引用となったが、Cさんは外国の方との関わりの中で、自分の生まれ育った地域のことに関心を持つようになり、そして関心を持つことによって自地域への愛着を深めていった。次にBさんの言葉である。

Bさん：姉妹都市を組んでいたというベースがあったからこそ、それに乗れたっていうのは大きいかも。多分そこがなかったら、行きたいとも思わなかった。佐呂間に生まれてよかったと思います。

Bさんは、貴重な機会を与えてくれた佐呂間町への感謝を語っている。Bさんは、佐呂間町とパーマ市が姉妹都市関係を持っていたために、幼少期にはホームステイの受け入れを行い、アラスカへの関心を深め、その後佐呂間町の援助を利用しながら、3度もアラスカに行くことになる。このような経歴がBさんにはあり、それがこうした発言につながっているのだと思われる。

佐呂間町とパーマ市との国際交流事業は、国際社会に貢献できる人材を育成するという役割を果たしつつも、それと同時に、新たな地域認識の獲得を促し、地域に貢献する人材を育成しているという側面もあることが指摘できるだ

ろう。

6. プログラムの長期的な教育効果について

アラスカでの様々な経験が基となって、異文化を持つ人々への理解は深まっていった。以下は、AさんとBさんの発言である。

Aさん：背景が全然違うのもあって、自分が当たり前だと思っていることは、あっちでも同じことを思っていて、当然ではないということは分かりました。

Bさん：偏見がないように生きたいってのは思っている。私自身ないとは言いきれない、ないけどないとは言いきれない。私の卒論もそういうテーマを書いて、それは関係あるかな。(偏見が)ない世界でありたいと思うように。

これらの発言から、「自分の当たり前は相手の当たり前ではない」、「偏見がないように生きたい」など、異文化を持つ人々への理解が深まっていったことが分かる。そして、異文化を持つ人々を受容し共生することのできる態度・能力が育まれていると思われるような発言もAさんとCさんからあった。

Aさん：同じ雪国で過ごす人々ってことで、やっぱり親近感はありました。アラスカも冬になると寒さも厳しくて、雪も降ったりとかで、車にすごい雪が積もっちゃったりとか。佐呂間であったようなこともあったので、そういう面では冬は特に大変だよなって感じで。

Cさん：大変さは分かるかもしれないですね。外に出られないとか簡単に、北海道もそうですけど、買い物に行く距離に何もなかったりとか、用は外で全部足してこないといけない。そういう生活の不便さレベルは一緒だと理解できた。ここに遊園地があればいいのにとかは思わなかった。「ないよね、何も」という理解力はあった。

北海道とアラスカという遠く離れた地域であるが、共に雪国で厳しい冬に耐えなければならないこと、へき地性の高い場所で暮らすことの大変さを共有しており、それが異文化理解に留まらず、異文化を持つ人々を受容し共生する

ことのできる態度・能力が育まれる契機となっていることが分かる。今日の国際教育においては、「異文化や異なる文化を持つ人々を理解するだけでなく、理解した上で、それらを受容しながら共生することのできる力が重要となる。」と指摘されている^(註11)。共に北方圏に位置する北海道とアラスカの国際交流活動は、冬の厳しさやへき地性を共有することで、この要件を満たしているといえ、この国際交流活動がもつ大きな強みの一つであると言えるだろう。

7. おわりに

本稿は、へき地・過疎地域における海外姉妹都市提携に基づく中高生相互派遣事業プログラムについて、その長期的な教育効果を明らかにした。調査対象者は、幼少期に外国から来た人たちと関わった経験がきっかけとなって、プログラムに参加するようになっていった。そして、アラスカでは、様々な経験をすることで、自国や自地域での経験を相対化したり、さらに幅広い経験をしたいと感じるようになっていった。高等教育に進学後は、語学を核としたキャリア形成を行っており、ふるさと佐呂間町にUターンしてくるような流れも見受けられたが、その背景にはプログラムの参加の際に醸成された地域意識があった。また、本プログラムの長期的な教育効果として最も特徴的なものは、異文化受容の深化である。北海道とアラスカに住む人々は、共に雪国で厳しい冬に耐えなければならないこと、へき地性の高い場所で暮らすことの大変さを共有しており、それが異文化理解に留まらず、異文化を持つ人々を受容し共生することのできる態度・能力が育まれる契機となっていた。これは、北方圏のへき地・過疎地域における国際交流活動の意義と可能性を示すものであると言える。

今後の課題としては、千歳市とアンカレッジ市の交流事業などにも目を向けていくことである。千歳市とアンカレッジ市は、共に大都市であり、佐呂間町とパーマ市との交流事業と比較することで、より北海道とアラスカの国際交流活動がもたらす教育効果について多面的に検討できるようになるだろう。また、今回の調査は調査対象者が少ないという課題もあり、今回の調査で明らかになったことを踏まえて、調査対象者を増やし、また調査方法も再検討しながら、この交流事業の教育効果について検討を深めていきたい。

8. 謝辞

調査にあたっては、佐呂間町教育委員会をはじめとして、佐呂間町の様々な方にお世話になりました。佐呂間町の皆さんの温かさに、心からの感謝を申し上げます。

付記

本稿は、北海道教育大学釧路校卒業論文である瀬川圭太(2023)「過疎地域における国際交流活動がもたらす教育効果－佐呂間町とアラスカ州パーマ市における中高生相互派

遣事業を事例として-」を一部加筆修正したものであり、本稿「1. はじめに」の一部において、瀬川圭太 (2023)「過疎地域における国際交流活動がもたらす短期的な教育効果-佐呂間町とアラスカ州パーマ市における中高生相互派遣事業を事例として-」『日本学習社会学会年報』19号と重なるところがある。

注記

- 注1 福宏人・前田賢次・川前あゆみ・玉井康之編 (2023)『学校力が向上する遠隔合同授業-徳之島町から学ぶへき地・離島教育の魅力-』教育出版
- 注2 佐呂間町と、アラスカ州スワード市と姉妹都市提携を結ぶ帯広市の周年記念誌の中で、プログラムの概要や参加者の声を確認することができる。
佐呂間町役場企画課編(1990)『友好と親善の10周年』
佐呂間町役場企画課編(2000)『友好と親善の20周年』
スワード市国際姉妹都市締結50周年記念事業実行委員会編 (2019)『スワード市国際姉妹都市締結50周年事業記念誌』
- 注3 短期的な教育効果について明らかにしようとする研究については、次のものがある。
木村雅幸・岩野雅子 (2018)「山口県における青少年海外派遣事業を通じた異文化理解について-英語圏への姉妹都市派遣プログラムについて-」『山口県立大学学術情報』11号、65-88頁
小池浩子 (2001a)「短期国際交流における高校生の異文化認知」『信州大学紀要』103号、105-111頁
小池浩子 (2001b)「短期国際交流における高校生の異文化認知Ⅱ」『信州大学教育学部紀要』104号、77-86頁
小池浩子 (2002)「ホームステイを通じた高校生の異文化認知」『信州大学紀要』105号、75-83頁
佐藤畝 (2007)「姉妹都市交流に関する考察に向けて-中学生の異文化体験の事例より」『Σ ヴ ヴ ボランティア人間科学紀要』8号、151-158頁
- 注4 北海道教育委員会は、地理的再編が困難で、かつ地元からの進学率が高い1学年1学級の高校を地域連携校として位置付けている。
- 注5 「語り」については、以下を参考にした。
やまだようこ編 (2000)『人生を物語る-生成のライフストーリー-』ミネルヴァ書房
- 注6 分析にあたっては、以下の書籍も参考にした。
佐藤郁哉 (2008)『質的データ分析法 原理・方法・実践』新曜社
- 注7 ホームステイの受け入れは、参加者への義務であるが、Bさんの家庭のようにホームステイの受け入れだけを行う家庭も例外的に存在している。
- 注8 現在、佐呂間町では、中学生と高校生をパーマ市に派遣しているが、かつて小学生を派遣していることもあった。小学生の発達段階や引率の大変さが考慮

されて、現在は小学生の派遣は行われなくなっている。

- 注9 発言内の個人名は伏し、〇〇などで示した。
- 注10 パーマ高校には、かつて佐呂間町に留学をし、ALTも務めた方が勤務されており、その方が日本語クラスをパーマ高校で開講している。
- 注11 文部科学省(2005)『初等中等教育における国際教育推進検討会報告~国際社会を生きる人材を育成するために』、2頁

参考文献

- 伊藤太陽 (2020)「人権としてのへき地教育-アラスカ先住民族教育史からの教訓-」『へき地教育研究』75号、95-101頁
- 川前あゆみ・玉井康之・二宮信一編 (2016)『アラスカと北海道のへき地教育』北樹出版
- 久保理恵(2017)「内子町の国際交流事業の成果と課題」『松山大学論集』第29巻4号、245-269頁
- 玉井康之 (1997)『現代アラスカの学校改革-開かれた学校づくりと生涯学習-』高文堂出版社
- 玉井康之・川前あゆみ (2021)「アラスカの多文化理解教育の施策と学校・地域における共生社会実現のための教育」学会創立30周年記念論集編集委員会編『コミュニティの創造と国際教育<日本国際教育学会創立30周年記念論集>』明石書店
- 平井華代・阿部恵・尾中夏美編 (2020)「中学時代の海外研修体験が持つその後の人生へのインパクト」『国際教育』25号、50-64頁

